

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 23 日現在

機関番号：11302

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23531038

研究課題名(和文)子どもの「問題行動」克服のための表現活動に関する現象学的研究

研究課題名(英文)Expressions of children for overcoming problems in the school : A phenomenological study

研究代表者

田端 健人(TABATA, Taketo)

宮城教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：50344742

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円、(間接経費) 1,110,000円

研究成果の概要(和文)：本研究が着目するのは、学校で生じる多種多様な「問題行動」である。例えば、いじめ、暴力行為、盗難、授業妨害や逸脱行動、発達障害(の可能性をもつ)子どもと周囲の子どもとの人間関係のもつれなどである。こうした問題行動の事例とその後の経過を、文献や観察によって収集し、現象学という哲学の方法を用いて、それら諸現象を現出させる本質を解明することを、本研究は目的としている。また、本研究は、問題行動を克服するために、実践レベルでは、子どもの表現活動を豊かにすることが有効であるという作業仮説を立てている。さらに、本研究では、教育実践を学術的に研究する方法論として、現象学アプローチを検証し開発する。

研究成果の概要(英文)：The study is focused on a variety of "problematic behavior" of children at the school. For example, bullying, violence, theft, deviant behavior and the conflict between developmental disorder children and the others. This study aims 1) to collect cases of such a problematic behavior and its recovery, and 2) to discover the essence, which let children to emerge such behavior and recovery, through the phenomenology. In addition, in order to overcome the problematic behavior, in the practical level, this research has made a working hypothesis, "to enrich the expression of children is effective against the problem". And this study includes to inquire phenomenology as the methodology for approaching a educational practice.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：問題行動 表現活動 質的研究 現象学 学級運営 授業

### 1. 研究開始当初の背景

学校や学級で生じる多様な「問題行動」への対処は、主に次の二つの方法によってなされてきた。臨床心理学や心理療法の方法、実践者の経験知に裏づけられた方法。これらは、相互に影響しながら進展し、一定の成果を収めてきた。

しかし、の実践知に根ざした対処方法は、の臨床心理学や心理療法では必ずしも十分に汲み尽くされてきたわけではない。の学術によっては、まだ着目されていない有効な対処法が、実践現場では多様に存在する。

また、の対処法は、高度に専門分化しているため、現場教師は、その全てを理解し身につけることはできない、という問題点もある。さらに、こうした専門的知識や対処法を身につけていない教師であっても、学校現場で生じる多種多様な問題行動に、うまく対処できているという事実も一方には存在する。

こうした問題意識が、本研究開始当初の背景になっている。

### 2. 研究の目的

学校や学級で子どもが起こす多種多様な「問題行動」は、どのようにして解決・克服されているのか、そこには問題行動の多様性を貫く共通の要因があるのではないか。これを、明らかにすることが本研究の目的である。

この目的を果たすために、本研究は、次の3点に着目する。

(1) 問題行動の克服においては、子どもの表現活動を豊かにすることが一定の有効性をもつ、との作業仮説を立てる。これは、日本の教育実践の歴史の中で一定程度支持されてきた見解であり、研究代表者の準備段階での観察と調査からも支持された仮説である。

(2) 学術的導きとしては、現象学や実存哲学や対話哲学(以下両者を合わせて「現象学」と一括表記する)を応用する。現象学は、心理学や他の社会科学の諸前提を問い直し、一層根底的な事態に迫り、それを解明しようとする哲学である。それゆえ、心理学が提供してきた関連知見や対処法とは異なる知見や対処法を、教育現場の事実からさらに広く汲み取ることができる。そのために、現象学を導きとする。また、現象学を、教育実践研究に応用すること自体についても、方法論的な反省的考察を行う。

(3) 実践現場を参与観察し記録することで、これまで発掘されてこなかった事例や対処法を見つけ出す。問題行動の事例を取り上げた研究や書籍は相当数にのぼるが、事例を言語化したり、取捨選択する時点で、既に一定の「理論」が介入している。そのため、従来の理論的な目にはとまらなかった事例やエピソードや働きかけが、発見されないまま、現場に埋もれているはずである。それを、新たな理論的な目である「現象学」によって現

実を見ることで、さらなる発見を試みる。

### 3. 研究の方法

(1) 事例の収集。そのために、以下の複数の手法を用いる。

代表者自身による参与的観察。教員志望学生を調査協力者とした参与観察。教師へのインタビュー。メールでのやり取りなど。

代表者が準備段階で蓄積した参与観察記録。

文献に記録された事例の収集。

2011年3月11日に発生した東日本大震災により、研究代表者が調査を予定していた宮城県内の学校現場では、日常性を失った状況が長く続いた。そのため、上記(1)の事例収集は、当初の計画通りには進まなかった。その分を、(1)の事例によって補った。また、他の調査研究において、災害の被害が大きかった現場教師へのインタビューを相当数行ったため、そのインタビュー中に、当該研究に関連する事例を収集できた。2013年度は、中学校でも参与観察も行った。(1)の手続きからも、多くの事例を収集した。

(2) 多種多様な事例において隠されている本質を露わにする方法論として、現象学を導きとする。現象学に導かれた観察行為は、概ね、以下のプロセスをたどる。

素朴に行う観察行為の反省的捉え直し。研究者自身の観察の問い直し。研究者による観察は、はたして事実の本質に関わる現象を知覚できているか、を反省的に問い直し捉え直す。この反省的捉え直しは、現象学によって学術的に可能になる。現象学の知見によれば、研究者も含む私たちの知覚は、学問の諸成果(先入見)に影響を受けている。その影響を一端脇に置く「判断中止」という態度変更によって、新たな知覚の可能性が開かれる。

完全な判断中止にいたらずとも、一定の判断中止を行い観察を継続するならば、観察中に現象の本質に関わる「問い」が浮上する。この問いは、判断中止を一層促進する。

判断中止が一定程度成功するならば、本質洞察のための鍵となる現象が「驚き」や「震撼」を伴って現出する。決定的な出来事との出会いが生じる。現象への「驚き」や「震撼」から、哲学的(学術的)思考が駆動する。驚きを与えるものは、諸現象の本質に接近することを可能にする。また、驚きを与えるものは、通常の言語では記述困難であるため、その事柄に即した術語を慎重に選ぶ、あるいは相応しい術語を創り出す。

### (3) 一連の考察の論文化。

一般的な学校の日常的な実践において、しばしば生じる「問題行動」を継続的に観察する中で、その事例に関して、新たな「問い」が発生し、なにか「驚くべき」ことが生じるならば、その驚くべきことは、問題行動の克服の本質を強く示唆している。克服の可能性が閃く瞬間であったり、予想もしなかった成長が実現した場面である。あるいは逆に、問題が一層深刻化する場面、ネガティブな「驚愕」の場面にも遭遇する。これはこれで、問題行動の本質に接近しており、問題行動の問題性の一層強烈な発動とみなすことができる。

教育現場で生じる問題行動のこうした本質的動揺を、その現場にいなかった第三者も追理解可能になるように、記述する行為が、論文化である。

## 4. 研究成果

本研究のようないわゆる「質的研究」の方法論的反省に関する研究成果は、代表者による雑誌論文( )、学会発表( )、図書( )として公表した。

事例に即した論文化へと至った研究成果は、雑誌論文( )、学会発表( )、図書( )である。

本研究で蓄積した事例や方法論や知見は、代表者の新年度の科学研究費助成研究「発達障害の子どもを包括する通常学級の指導法に関する質的研究 現象学アプローチ」へと発展的に継続し、今回の研究成果を含め、成果を今後も継続的に発表していく計画である。

研究成果の主要な内容を概略すれば、以下の通りである。

(1) 質的研究の方法論に関する反省的捉え直しにより、上記3(2)(3)に概略を示した、現象学的に基礎づけられた新たな研究方法論をある程度提示できたこと。教育現場での参与的観察をきっかけとして生じる「問い」や「驚き」や「震撼」といった主観的・印象的出来事が、事例への本質的理解の進展の核になっていることを、現象学によって学術的裏づけをもって示した。

(2) 自閉症研究においてこれまで中核理論とされてきた「心の理論」仮説 = 「心理化」仮説とは異なる発達障害理解に至ったこと。

バロン・コーエンやウタ・フリスが中心となって唱え広く認知されていた「心の理論」仮説による自閉症理解は、おおよそ以下のようであった。

心の理論仮説とは、いわゆる「健常児・者」には相手の心を推測する能力がある、とする説であり、自閉症児・者には、この能力が欠けていると考える説である。

自閉症の症状は事例に応じて異なると言

われるほど多様であるが、ほとんどの事例に、ローナ・ウィングが指摘する障害の三つ組(Triad)があり、それは、「対人関係の障害」「コミュニケーションの障害」「ごっこ遊びの障害」とされる(フリス 2002『自閉症の謎を解き明かす』東京書籍 p.293)。そして、自閉症児には「心の理論が欠けている」と考えるならば、これら一見相互に無関係な症状を、「全体として意味あるものとして理解できるようにする」とされる(フリス 2002, p.294)。

他者の心の「推論」は、意識的な推論であることもあるが、意識的でないこともあり、私たちは相手の心について「無意識に多くの計算をしている」(フリス 2002, p.267) と心の理論仮説はみなしている。

しかし、現象学的な他者論の成果からすれば、こうした「一種の記号解読」による他者理解は、根源的ではないと考えられる。現象学によれば、一層根源的な他者理解が、身体レベルで生じているはずであり、「計算」や「推論」以前の身体レベルにおいて、自他の「癒合」や「対化」が生じているはずである。

自閉症や発達障害の子ども理解に関わるこうした学術的先入見を、現象学によって一時的に判断中止し、観察時の近くに置いて機能することを一時停止させることによって、それまでは気づかなかつたり注目されてこなかった現象が、注目すべきこととして観察者に近くされるようになる。このことによって、本研究では、アスペルガー症候群や発達障害が疑われる子どもの対人関係の阻害とその緩和が、明らかに認知に関わる計算とは違うレベルで生じる場面を、発見できた。

発達障害が疑われる子どもの社会性の阻害が緩和される、新たな気づきの場面の主要な特徴は、次のようなものであった。

そうした子どもが周囲から受け入れられているという一種の「あたたかい」雰囲気、気分に含まれていること。

自分が関心をもつ事物に、他の子どもも関心を共有してくれること。

自他の間で身体運動の同期や呼応や調和があること。また、自他の間の身体運動のこうした同期・呼応・調和には、大なり小なりリズムと情動(気分)が埋め込まれている。スターンのいう「情動調律(affect attunement)」(スターン 1989『乳児の対人世界』岩崎学術出版社)に通じる運動場面とも言える。

教師がそうした子どもの存在へと自分の存在を共振させ、ブーバーのいう「ウム・ファッスルク」という存在論的転移を起こす場面

と が、「表現活動」に関連する特徴である。ただ、この場合の「表現」という概念は、自分の内面を外へ現すという通説的理解を超えて、外の世界に自己をさらし出し、他者と共に物ごとへと関わる、あるいは他者へと関わるという新たな意味になる。みんなが

見ている世界、つまり共通の世界に、自分なりに何かを作り出したり、意見を提示したり、その世界で自分の身体を他者に合わせて動かすなどの活動が、本研究で到達した「表現活動」の新たな内実である。

そして、こうした表現活動が、問題行動の改善や克服に寄与することを、幾つかの事例によって、一定の確かさをもって示すことができた。

加えて、当該研究期間の終盤では、自閉症スペクトル障害の症状の緩和に関する本研究の上記の知見は、脳神経科学のミラーニューロン説と親和的であることが判明してきた。

ミラーニューロン説もまた、認知心理学における「心の理論」仮説を、他者知覚の根源を捉え損ねていると強く批判しており、その知見から、自閉症の症状緩和プログラムに、自閉症児を受容した模倣行為を多く取り入れるという研究を、近年積極的に行っていることがわかってきた。

今後は、本研究の知見とミラーニューロン説との異同や関連を明らかにしたい。これが、本研究を通して明らかになった新たな課題である。

(3) 主要な研究成果としては、さらに、上記(2)と関連するが、教室の「空気」とか「雰囲気」といった、教師や子どもや研究者の素朴な感覚に自明に与えられる直感的要素が、問題行動の改善や克服に深く関与していることを示し、それを記述する新概念を提示したことをあげたい。

この成果は、論文と図書で部分的に発表した。

こうした「空気」に加え、教師や研究者や子どもたちに直感的に感知される「光」「熱」といった現象が、子どもとその集団の人間形成・コミュニティ形成に、大きく関与していることも明らかになった。

もちろん、ここでいう「空気」「光」「熱」は、物理学の意味ではなく、器具装置によって計測される物理学的現象ではない。むしろ、私たち人間の知覚を通して直接的に感知される現象である。

現象学は、こうした現象を学術的に把握し記述するためにも、有効な概念と方法を提示している。この知見に至ったことも、本研究の一つの成果である。

同時に、こうした人間的現象は、確かに物理学的現象ではないものの、物理学の理論は、こうした人間的現象をいっそう深く理解するための思考枠組みなりメタファーを豊富に提供し得るのではないかと、との予見に至ったことも、本研究の成果である。

さらに、人間やコミュニティの成長における「光」の重要性の認識は、教育哲学ないし西洋教育思想史とも強く連動し得る可能性を示唆している。例えば、コメニウスは、知を光とみなし、『光の道』という教育論社

会論を記しているが、そうした教育哲学との連動の可能性も示唆された。さらには、コメニウスに影響を与えた新プラトン主義における「光の形而上学」、さらにさかのぼって、プラトン自身が記した『国家』『洞窟の比喻』における「真理＝アイデア＝太陽の光」の重ね合わせなど、教育哲学の根源に関わる議論へとつながったことも、大きな成果の一つである。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

田端 健人、教育の存在論は可能か？  
ハイデガー学問論から、宮城教育大学  
学校教育講座教育学研究室、学ぶと教える  
の現象学研究、査読無、15、2013、  
pp.1-18

[https://docs.google.com/file/d/0B4\\_loERDhcaIYkVaVctUWYyT28/edit](https://docs.google.com/file/d/0B4_loERDhcaIYkVaVctUWYyT28/edit)

田端 健人・真竹 健人、「荒れた学級」  
からの回復事例 M.ブーバー「人間関係  
の存在論」からの解釈、宮城教育大学  
紀要、査読無、第47巻、2013、pp.255-276、  
[http://ci.nii.ac.jp/els/110009536398.pdf?id=ART0009984765&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order\\_no=&ppv\\_type=0&lang\\_sw=&no=1402896626&cp=](http://ci.nii.ac.jp/els/110009536398.pdf?id=ART0009984765&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1402896626&cp=)

田端 健人、質的研究における「問い」  
について 「問いの現象学」を手がかり  
に、宮城教育大学紀要、査読無、第46  
巻、2012、pp.185-192、  
[http://ci.nii.ac.jp/els/110008767611.pdf?id=ART0009842072&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order\\_no=&ppv\\_type=0&lang\\_sw=&no=1402896672&cp=](http://ci.nii.ac.jp/els/110008767611.pdf?id=ART0009842072&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1402896672&cp=)

田端 健人、現象学的／解釈学的アプロ  
ーチにおける「記録と解釈」 質的研究  
との関連で、日本教育方法学会、研究  
集会報告書、査読無、15、2011、pp.14-23

田端 健人、通常学級に在籍する「特別  
な配慮を要する子ども」の世界疎外  
ハイデガーによる子どもの現存在論を導  
きとして、学ぶと教えるの現象学研究、  
査読無、14号、2011、pp.31-44

田端 健人、現象学的／解釈学的アプロ  
ーチにおける「記録と解釈」 質的研究  
との関連で、日本教育方法学会、研究  
集会報告書、査読無、15、2011、pp.14-23

田端 健人、通常学級に在籍する「特別  
な配慮を要する子ども」の世界疎外  
ハイデガーによる子どもの現存在論を導  
きとして、学ぶと教えるの現象学研究、  
査読無、14号、2011、pp.31-44

〔学会発表〕(計5件)

田端 健人、「荒れた」学級からの回復場  
面 M.ブーバー「人間関係の存在論」に  
よるエピソード解釈の試み、日本教育  
方法学会第16回大会、福井大学、2012  
年10月7日

田端 健人、教育関係における他者の受  
容 マルティン・ブーバーによるカール  
・ロジャーズ批判から、日本教育  
学会第71回大会、名古屋大学、2012年  
8月26日

田端 健人、ハイデガー哲学における教育人間学の可能性、日本教育哲学会第54回大会、上越教育大学、2011年10月16日

〔図書〕(計3件)

田端 健人、子どものケアと学校教育  
教室の〈空気〉と〈光〉の現象学、西平直編著、ケアと人間、ミネルヴァ書房、2013、pp.165-186

田端 健人、教育実践の記述、遠藤司編著、教育心理学、一藝社、2013、pp.117-130

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田端 健人 (TABATA, Taketo)  
宮城教育大学・教育学部・准教授  
研究者番号： 50344742